

教師特有のイラショナル・ビリーフが 教師・児童のストレス反応に及ぼす影響

高野 あゆみ

〈問題と目的〉

これまでに、教師という職業は、多忙、人間関係などのストレスが多く、ストレスが高くなりやすいことが示されている。しかし、ストレスの大きさには個人差があり、個人差を生み出す要因として、個人の認知が指摘されている。ストレスに関連する認知的要因の1つにイラショナル・ビリーフがあり、横湯（1992）や石隈（1993）は、教師は教育を行ううえで特有のイラショナル・ビリーフを持ちやすい傾向があることを指摘している。このような教師特有のイラショナル・ビリーフは教師のストレスに影響を与えている可能性が考えられる。また、教師のイラショナル・ビリーフは児童・生徒にも影響を与えることが示されているが、教師のイラショナル・ビリーフと児童のストレス反応との直接的な関係は明らかになっていない。そこで本研究では、教師特有のイラショナル・ビリーフの強さが、教師自身や児童のストレス反応にどのような影響を与えているのか検討を行った。

〈方法〉

対象：地方都市部の公立小学校の教師と4～6年生の児童に質問紙を実施した。

調査材料：以下の3種類の尺度を使用した。

教師①教師特有の指導行動を生むイラショナル・ビリーフ尺度（河村・國分，1996）：教師の態度や指導行動、児童への対応行動の背景にあると考えられるビリーフの強迫性を測定する尺度
②心理的ストレス反応測定尺度（SRS-18：鈴木他，1997）：心理的ストレス反応を測定する尺度
児童 小学生用ストレス反応尺度（SRS-C：嶋田他，1994）：小学生のストレス反応を測定する尺度

〈結果と考察〉

教師のイラショナル・ビリーフの特徴として、

「教える側 - 教えられる側」という関係ではなく、人間同士のつながりを大切にしようという考え方で、学校のきまりを守ってほしいと児童に求めている理想像が存在していることが明らかになった。そして、このようなイラショナル・ビリーフは個人属性とは関係なく、教師という職務の内容や立場から起こるものであることが示唆された。また、教師特有のイラショナル・ビリーフの高さと教師や児童のストレス反応に直接的な関連はないことが明らかとなり、教師のイラショナル・ビリーフが単独で教師や児童のストレス反応に及ぼす影響は小さいことが示された。しかし、イラショナル・ビリーフの因子と教師・児童のストレス反応との間に関連がみられ、教師や児童のストレス反応に影響を及ぼすのは、教師の持っているイラショナル・ビリーフの高さではなく、持っているイラショナル・ビリーフの内容であることが示唆された。

〈主な文献〉

河村茂雄・國分康孝（1996）．小学校における教師特有のビリーフについての調査研究 カウンセリング研究，29，44-54．